最後の事件記者

三田和夫

最後の事件記者

三田和夫

実業之日本社

最後の事件記者

定価 220 円

昭和33年12月30日　発行

著者　三田和夫

発行者　増田義彦

発行所　株式会社 実業之日本社
東京都中央区銀座西1の3
電話京橋 (56) 5121～5
振替口座東京326

© 実業之日本社　1958年　印刷　株式会社 佐藤印刷所

はしがき

私が、さる七月二十二日、横井社長殺人未遂事件の指名手配犯人を、北海道に逃がしてやったということで、「犯人隠避」罪の容疑に問われ、警視庁捜査二課に逮捕されてから、もう五ヵ月になる。

ということは、私が在職十四年十ヵ月にもおよぶ、読売新聞社会部記者の職を投げ出してから、五ヵ月になるということだ。つまり、私はその逮捕の前々日に社に辞表を出したからである。

私には私なりの論理があって、「辞めるべきだし、辞めねばならない」と思って、サッパリと辞表を出したのだが、世の中というのはむつかしいもので、あまり辞めッぷりが良かったので、かえって痛くもないハラを探られたらしい。

つまり、「奴は取材だといってながら、後暗いから辞めるのだろう」とか、「安藤組の顧問という、高給の就職口が決っているから、平気なンだよ」とか、いったたぐいだ。

ある三流雑誌が、〝悪と心中した新聞記者〟という題で、私のことを、安藤とは法政の先輩後

輩の仲で、安藤のツケで銀座、渋谷を飲み廻っていた、と、全く事実無根のことを書いた。保釈出所してそれを読んだ私は、早速その社へ抗議に行った。

すると、御アイサツである。「オヤ？　あなたはあの世界へ行かれるのではないのですか。好意的に書いてあげたつもりですのに」という。開いた口がふさがらない。

それどころではない。私の逮捕、起訴を報じた新聞の記事を読んで、いささか感慨にふけったのである。つまり、その記事をよむと、私は全くグレン隊の一味としか、思われないのである。「オレも落ちたものだなア」と、他人事のように考えていた。

だが、次の瞬間には、果して、オレもあのような記事を書いていたのだろうか、という反省が、それこそ、ボツ然と湧き起ってきたのである。果して、新聞は真実を伝えているであろうか、という疑問だ。

イヤ、少くとも、三田記者はその記事で真実を伝えたであろうか、ということだ。今までの私なら、言下に、然りと答えただろう。だが、日と共に私はその自信を失いつつあるのだ。書く身が書かれる身となって、はじめて知った真実である。

いかにも、私の逮捕や起訴を報じた記事は、その客観的事実に関する限り、真実であった。私

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たちが新聞学で教わった五つのW、何時、何処で、誰が、何を、どうした、という、この五つのWを充足する、客観的事実は真実であった。——だが、決して真実のすべてではなかったし、一部の真実が、全体を真実らしく装っていたのである。

私は、そのことを発表したかった。もっと端的にいえば、グレン隊の一味に成り果てた私が可哀想だったから、弁解をしたかったし、弁解を通じて、「新聞は、果して真実を伝えているだろうか」という、世の多くの人たちが感じはじめている疑問を、もっと的確に、改めて提起してみたかったのである。

そして、私は文芸春秋十月号に、「事件記者と犯罪の間」という、長文を書いた。

これには、いろいろの意味で、大きな反響があった。私の手許にも、未知、既知を問わず、多くの感想がよせられたのだった。

この一文の反響を知って、私はさらに、あの一文で提起した、「新聞」と「事件記者」との問題について、もっと書かねばならないと感じたのである。もっとより多く、より深く、新聞と新聞記者とを知ってもらいたいと考えたのである。

日本中で、毎日発行されている何千万部もの新聞について、読者はもっと正確な知識を持たな

ければならない。そうでなければ、あの〝活字の持つ魔力〟に、ひきずり廻される危険がある。

若輩の私が、ここで、その大きな問題について、明快な解答や結論を出そう、というのではない。これは、一人の事件記者の生活記録でしかない。

それも、事件と新聞という、大きな谷間におちこんでしまった、一人の男のそれである。彼を犠牲者と呼び、ピエロと名付けようとも、これが、事件記者の現実である。

芸術祭参加のテレビ・ドラマ「マンモス・タワー」は、映画とテレビの谷間におちこんだ生粋の映画人が、映画の世界を去らねばならなくなった記録であった。新聞もまた、マンモスである。

テレビの「事件記者」は、来年もまたロングランをつづけるという。しかし、現実の新聞の世界では、私が〝最後の事件記者〟であるに違いない。

昭和三十三年十二月

三田和夫

目

次

はしがき　1
我が事敗れたり　11
共産党はお断り　32
あこがれの新聞記者　51
恵まれた再出発　70
サツ廻り記者　90
私の名はソ連スパイ　111
幻兵団物語　132

書かれざる特種　151
特ダネ記者と取材　173
「東京祖界」　197
スパイは殺される　220
立正交成会潜入記　246
新聞記者というピエロ　268
あとがき　292

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

最後の事件記者

我が事敗れたり

浅草のヨネサン

『オイ、ブンヤさん。電話だよ』

『エ？　電話？』

私は自分の耳を疑った。思わず上半身を起したほどだった。

ここは警視庁一階の留置場、第十一房である。七月二十二日の夕刻、逮捕状を執行されて、ブチこまれてから、生れてはじめての留置場生活に、毎日、新聞記者根性丸だしの取材を続けていた私だったが、〝電話〟と聞いては、驚きのため飛び起きざるを得ない。

板敷きの上に、タタミ表のウスベリを敷いた留置場は、正座が、留置人心得という規則によって原則である。しかし、旅馴れた私は早くも担当サンの眼を盗んで、横になって午睡をたのしん

でいたところだった。

二十五日間も暮したが、誰もブタ箱などという者はいない。つまり、往時の、不潔極まりない房内から、ブタ箱という名が生れたのだろうが、出たり入ったり、また出たりのオ馴染みさんでさえ、留置場という。ブタ箱という名は、全くすたれたようだ。

それほどに、留置場は清潔であり、目隠し塀のついた水洗便所、消毒された毛布、白いゴハンと、設備、待遇ともに、犯罪容疑者の詰め所としては、立派であった。

それにしても、電話とは！

私はまだ、記者クラブにでもいるような、錯覚におちいった。呼びかけた男の顔をみて、留置場だナ、と思い返したほどである。大辻司郎と吉屋信子、この二人にフランキー堺を足したような顔のその男は、〝浅草のヨネさん〟といわれる、パン助置屋の主人であった。

管理売春という、売春防止法でも重たい罪の容疑で入っている男だったが、人柄は極めてよく、フランキーのような明るさと機智とを持っている男だった。

私がこの房に転房してきた時、先客が二人いた。カタギの私は、この別世界の礼儀作法を良くは知らなかったが、普通の人間社会の礼儀を準用すれば間違いはないと考えた。

『どうかよろしくお願いします』

私は頭を下げた。両手をつくほどの必要はあるまいと思ったので、小腰をかがめただけだった。「十一房、ロの二六五番」というのが、私の認識票で、それが書きこまれた、小さな木札を入口の表札差しに、差しこんでおくのだ。

『……』

先客二人も、軽くうなずく。私はその房では新入りなので、一番奥の、一番下座である便所のそばに腰を下した。

二人の世界が、彼らの意志とかかわりなく、三人になったのだから、この第十一房という、小さな社会の構成要件が変ったことになる。つまり、革命だ。新しい社会秩序を確立しなければ、誰もが落ちつけない。

それには、この新入りの階級的出身と、社会的序列とを知る必要がある。旧支配階級が声をかけた。

『あんた、何です?』

何罪でパクられたのかということだ。私は心中ニャリとした。この質問を待っていたからであ

る。留置場でも、生活の智恵は必要である。〝小さな喫茶店で、タダ黙って〟と、恋人と二人きりでいるようなワケには参らんのだった。

『ウン……（ちょっと口籠って、どう説明したら判ってもらえるのかな、といったようなハッタリをつけて）。つまり、難しくいえば犯人隠避といって……。』

『ああ、読売新聞のダンナですね』

ヨネさんは、私の思惑を裏切って、ズバリといい切った。

『エエ、ソウ』

私は驚くと同時に、極めて不器用な返事をしてしまった。

『新聞記者でもパクられるのかねエ』

彼は感にたえたようにいう。もう、ずっと以前から私のことを知っていたような、親し気な調子だ。ヨネさんは、このように情報通であった。そして、その情報が、どうして集まるのかという、ナゾを解いてくれたのが、この電話だったのである。

安藤からの電話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com